

の評価を行ってもらい、その結果を総長に答申するという事で、非常にシビアな評価と助言をいただくものになっております。

位置づけとしましては、これが管理運営体制ですが、ここに座っている総長に対して、独立にアドバイザリーボードが評価を行って助言をする、こういう高いところに位置づけているものでございます。

ここに示しましたのは、委員に委嘱させていただいた先生方で、ノーベル賞を取られた

方3名を含む7名の国際的に著名な先生方に委嘱をしているところであります。分野も、生命、化学、言語学、法学、文学と、広い範囲をカバーする委員の先生方をお願いをし

ているところです。最初の議長は、野依先生をお願いをした、そういういきさつがございます。

過去5年間を振り返ってみますと、平成18年から2年半の間に3回のアドバイザリーボードが開催されました。

最初は平成18年2月で、同じ年ですが、年度をまたいでいる10月と、それから、昨年の10月にまとめの会合をしたということでもあります。最初の会合は、本学の研究のシンボルをあらわしている高等研究院、ここに対する評価と助言をいただくということで行いました。2度目は、大学院教育

に関する評価と助言ということで、一見異なって見える問題点についての評価をお願いし

インターナショナルアドバイザリーボード委員(~20年度)

| | |
|--|------------------|
| (独)情報・システム研究機構 理事 (前お茶の水女子大学学長) | 郷 通子 |
| カリフォルニア大学ロサンゼルス校 教授 (1998 ノーベル医学生理学受賞) | Louis J. IGNARRO |
| 東京外国語大学 名誉教授 (前学長) | 池端 豊浦 |
| 元台湾中央研究院 院長 (1986 ノーベル化学受賞) | 李 達哲 |
| 理化学研究所 理事長 名古屋大学 特別教授 (2001 ノーベル化学受賞) | 野依 良治 |
| フライブルク大学 法学部長 ハーバードロースクール 客員教授 | Rolf STÜRNER |
| コレージュ・ド・フランス 副学長 | Michel ZINK |

氏名は、姓名のアルファベット順、漢字氏名以外はアール・スト・ド・ル・ラ・ド・ネー・ム



インターナショナルアドバイザリーボード 会議実施状況

**第1回 平成18年2月6日ー7日
高等研究院に対する評価・助言**

**第2回 平成18年10月5日ー7日
大学院教育に関する評価・助言**

**第3回 平成20年10月2日ー3日
助言による改善状況：
高等研究院と大学院教育**

たところでは。

3度目は、これらをすべてまとめて、助言の改善状況、特に高等研究院と大学院教育についていただいたという、この3会合を行っているところです。

3. (2) 第1回 インターナショナルアドバイザーボード

これは、第1回のインターナショナルアドバイザーボードのプログラムでございます。平野先生のあいさつに続き、高等研究院の概要説明を、高等研究院の流動教員からの研究内容の発表ということで、こちらから現状を提示したということです。

それから、高等研究院にはシニアなカテゴリーと若手のカテゴリーがありまして、若手研究者による研究プロジェクトの紹介をいたしました。これらに対する研究の最先端、こういうことが本学の研究の今、先端を走っている内容ですということを申し上げた後に、高等研究院に対する意見をいただいたところです。この会のまとめとして、野依議長のもとでまとめられた意見をいただきました。

この高等研究院ですが、本学の研究を、よく使われる言葉で言いますと、ショーウィンドーのように、一番目立っている、光っているところを示すという、簡単に言うと、そのような位置づけで設立されたものです。平成14年設立時の、初代の野依院長から、ここに歴代の5人の院長の先

名古屋大学

第1回 インターナショナル・アドバイザーボード

平成18年2月6日(月)

9:30 開会：平野総長
10:00 名古屋大学の概要、研究活動等の説明・質疑応答
10:45 **高等研究院の概要説明**・質疑応答
13:30 高等研究院の**研究活動の説明**・質疑応答
福井 康雄 理学研究科教授 [物理学分野]
近藤 孝男 理学研究科教授 [生命科学分野]
磯部 稔 生命農学研究科教授 [化学分野]
佐藤 彰一 文学研究科教授 [人文学・社会科学分野]
15:40 **若手研究者による研究プロジェクト提案説明**・質疑応答
山口 茂弘 理学研究科教授 [化学分野]
関 華奈子 太陽地球環境研究所助教授 [地球惑星物理学分野]
奥地 拓生 環境学研究科助手 [地球惑星科学分野]
16:50 **高等研究院に対する意見** (司会：野依議長)
18:00 終了



平成18年2月7日(火)

9:30 **高等研究院についての提言案**とりまとめ (司会：野依議長)
11:30 閉会：平野総長・北住高等研究院長
11:40 記者会見



記者会見

名古屋大学

◆ 高等研究院

設置目的

高等研究院は、名古屋大学が、学術憲章に基づき、世界最高水準の研究活動を推進し、卓越した研究成果をあげ、さらにそれを社会に還元するため、全国の大学に先駆けて2002年に創設された部局を超えての研究専念組織。

歴代院長

| | | | | |
|---|---|---|--|--|
|  初代院長 野依 良治 平成14年4月1日～ 平成15年9月30日 |  第2代院長 佐藤 彰一 平成15年10月1日～ 平成16年2月29日 |  第3代院長 後藤 俊夫 平成16年3月1日～ 平成17年3月31日 |  第4代院長 北住 炯一 平成17年4月1日～ 平成19年3月31日 |  第5代院長 近藤 孝男 平成19年4月1日～ |
|---|---|---|--|--|

生方のお顔と期間をお示しました。これは、研究成果を社会に示して、それを社会に還元するという意思を持って、全国の大学で多分先駆けとして、今から7年前に創設をされた組織であります。INSTITUTE FOR ADVANCED RESEARCHと云っているのです、IARという略語が使われております。

国際アドバイザーボード報告書を野依議長が提出
(平成18年7月11日)

- 高等研究院の使命に対して、様々な観点から提言
1. 名古屋大学における**特に優れた研究を認知**すること。
 2. 「**最先端研究**」及び「**萌芽的研究**」を支援すること。
 3. **学際的交流及び国際的交流**を触発、展開すること。
 4. 人文、社会、自然科学並びにその工学的、医学的応用に関わる問題について**独立の立場から権威ある助言を大学**に行うこと。
 5. 一般社会における**科学の重要性の認知と理解**を促進すること。



これは第1回の諮問会議の後で高等研究院からいただいた提言であります、5つの問題について、お褒めの言葉もいただきながら、かなりきついおしかりのような言葉もこの中に入っております。最先端教育と研究をきちりできているが、高等研究院のプレゼンスそのものとしてはシャープさが足りないというようなことがこの中に含まれているところです。これは、そのときのスナップショットで、院長の北住先生、総長、議長の野依先生です。これを簡単にまとめますと、第1回総評、これは私の私見なので、もしかすると少し偏っているかもしれません。高等研究院というのは、名古屋大学の中でよくやっているが、流動教員の絞り込みなど、改善すべき事項を多く残している。最後に、もっと頑張りなさいと言われた、そういう会であったように全体としては記憶をしているところであります。

3. (3) 第2回 国際アドバイザーボード

2回目は、先ほど申し上げましたように、大学院教育に関するものでございました。これは、委員と大学院生との触れ合いというようなこと、そういうのもつくりながらの会議で、今度は3日間にわたって行ったところです。2日目、メインの日には、名古屋大学の

第2回 国際アドバイザーボード

平成18年10月5日(木)
午後 **大学院生と諮問委員の交流**



平成18年10月6日(金)
9:20 開会挨拶
9:30 第1回会議の助言事項への対応・意見交換
10:20 高等研究院若手研究者によるプレゼンテーション
11:20 名古屋大学の**大学院教育の説明**・質疑応答
14:00 **大学院教育改革の個別事例の紹介**
16:30 諮問項目に対する意見交換
17:30 終了

平成18年10月7日(土)
9:30 答申案の提示及び審議
10:40 **答申案審議**・まとめ
11:30 閉会挨拶



大学院教育の説明を、大学院生も登場して行い、個別事例の紹介等も行っておりまして、その辺に時間を使っているところと、3日目には答申案が出ました。その話題提供のところでは、いわゆるGP、グッド・プラクティスとあって、競争的環境でいただいているような資金、こういう資金をもって、どういう教育の改革、改善が図られているかを大学院教育を中心にお話をしたわけでありまして。すべてではありませんが、目立つものについて行いました。

これは、スナップショットのまとめであります。これは野依先生、李先生、平野先生の歓談状況です。パーティーの歓談風景がこちらです。上は、池端、当時、東京外国大学長と大学院生、留学生も含む国際開発の学生との交流。下は、郷委員と大学院生、理学研究科の様子を示したものであります。

このときの助言、提言であります。大学院教育のあり方に、「よくやっているけれども」というのがつきまして、明確な教育目標に基づいた大学院教育をさらに実践するという、かなり厳しい言葉もいただきました。「この教育目標に基づいて、世界最高水準の教育と研究が一体となった拠点形成を促進すること」で、世界に伍して競争力のある大学院プログラムをさらに作成して維持していくことという言葉をいただいております。

これは表向きの言葉で、褒めながらも厳しい言葉をいただいております。これも私見でありますので刷り物にしておりません。いろいろ議論があった中で、日本の大学院、特に

◆ GP

大学院教育改革推進プログラム
 現代的教育ニーズ取組支援プログラム
 大学教育の国際化加速プログラム
 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム
 大学病院連携型高度医療人養成推進事業
 がんプロフェッショナル養成プラン
 産学連携による実践型人材育成事業
 先進的ITスペシャリスト育成推進プログラム



会議の合間に意見交換する
野依委員、平野総長、李委員



池端委員と大学院生との交流の様子
(国際開発研究科にて)



郷委員と大学院生との交流の様子
(理学研究科にて)

理系、文系もそうだと思いますが、大学院教育の方法が欧米とはかなり異なっています。先生が存在感を示し、背中を見せて教育するというタイプ、スクーリング中心の教育ではなくて、そういう教育のよさは十分に感じられるので、この部分はそのまま維持をしてもよいということがま

とめの中で言われております。グローバルスタンダードとって、何でも欧米化、ということがいいわけではなく、日本型の教育にもいいところがあるということをお願いした。これは多分に目線が偏っているかもしれません。私は安心した、というのでよく覚えている点でございます。

国際ナショナル・アドバイザーボード報告書を郷議長が提出 (平成19年6月17日)

- **大学院教育の在り方**について、様々な観点から提言
1. **明確な教育目標に基づいた大学院教育**を実施すること。
 2. **世界最高水準の教育研究拠点**を促進すること。
 3. 世界に伍して**競争力のある大学院プログラム**を作成し、維持すること。



3. (4) 第3回 国際ナショナルアドバイザーボード

第3回は、今までの2つの視点、高等研究院と大学院教育に対する2つのものについて、助言がどのように生きているかという視点で見ていただいたところです。中身については、大学院教育の現状の紹介です。グローバルCOE等のプログラムで、こういう大学院教育をするということを誓って

動き出したものと、既存の工学研究科の流動大学院システムのように既に定評のあるものなど、いろいろな事例をさらに紹介したところであります。

それから、高等研究院と関連づけた最先端の研究では、やはりグローバルCOEです。21世紀COEを受けたグローバルCOEでの活動状況というのを、学生の教育、このグローバルCOE

第3回 国際ナショナル・アドバイザーボード

- 平成20年10月2日(木)
- 9 : 30 開会：平野総長
 - 9 : 45 高等研究院の研究活動の現況と課題
 - 10 : 15 **グローバルCOE採択拠点プログラムの紹介**
 - 13 : 45 ディスカッション
 - 14 : 45 大学院教育の現況と課題
 - 15 : 15 **大学院・学部における教育プログラム**
の魅力と課題 (6組：90分)
 - 17 : 00 ディスカッション
 - 17 : 40 記念写真

★平成20年10月3日
IAB関連企画：名古屋大学IABレクチャー



プログラムは、若手育成、大学院の後期課程の振興というところに力点が置かれておりますので、そういうことと関連づけての紹介をしたということでした。

発表風景、質問風景、いろいろスナップショットがありますが、このような雰囲気、結構緊張感のある会合です。発表は、日本語でもいいシステムでありましたが、ほぼ英語でございました。

大学院教育の現状と課題

- ・人文学フィールドワーカー養成プログラム(文学研究科)
- ・流動型大学院システム(工学研究科)
- ・日本法教育研究センター(法学研究科)
- ・海外臨床研修の実施(医学研究科)
- ・名古屋大学短期留学生交換プログラム(留学生センター)
- ・日独共同大学院プログラム(物質科学国際研究センター)

グローバルCOE

| 分野 | 拠点のプログラム名称 | 拠点リーダー |
|----------------|--------------------------------------|------------------------|
| 学際・複合・新領域 | 地球学から基礎・臨床環境学への展開 | 地球水循環研究センター 安成哲三教授 |
| 医学系 | 機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点 | 大学院医学系研究科 祖父江元教授 |
| 数学・物理学・地球科学 | 宇宙基礎原理の探求 - 素粒子から太陽系、宇宙に至る包括的理解 - | 大学院理学研究科 杉山直教授 |
| 機械・土木・建築・その他工学 | マイクロ・ナノメカトロニクス教育研究拠点 | 大学院工学研究科 福田敏男教授 |
| 生命科学 | システム生命科学の展開: 生命機能の設計 | 大学院理学研究科 近藤孝男教授 |
| 化学・材料科学 | 分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成 | 物質科学国際研究センター 渡辺芳人教授 |
| 人文科学 | テキスト布置の解釈学的研究と教育 | 大学院文学研究科 佐藤彰一教授 |



プレゼンテーションを聴講する委員ら (左から野田委員、池崎委員、李委員)



活発な議論を交わす委員ら (左から野田委員、シムコルナー委員、ザンク委員)



グローバルCOE 探討研究プログラムの現状を報告する祖父江教授



教育プログラムの経験を発表する野田医師

4. 高等研究院の構成

高等研究院そのものの構成ですが、現在では、アカデミー会員7名をいただいております。そして、それから、研究プロジェクト代表教員が、タイプ1として、世界最高水準の研究員5名、タイプ2として萌芽的・独創的若手プロジェクト研究員4名、このように今は最初の提言に基づいて、非常に絞られた教員で成り立っています。

2番目には、高等研究院に若手育成特別プログラムを置いていること。これは、科学技術振興調整費をいただいて実施しているテニュアトラック制度の教員を、ここに今所属してもらっているという位置づけでありまして、ここはかなり線を引くべきものであります。それから、関係者は院友といい、今、たくさんの数に上っています。

このインターナショナルアドバイザーボードの総まとめとして、野依委員からのご指摘が昨年ありました。野依委員は、初代院長、全体を統括する総合院長的な存在です。名古屋大学の高度な研究水準を国内外に示す存在であって、きちんと行っているが、「メンバーはこれを一目瞭然で示し、だれもが尊敬し、だれもが誇りを持つメンバーシップを持つべき」というご指摘です。まだまだ見ていると、これでは十分ではないというようなニュアンスにとれます。

大学院教育に関しては、学内教育資源の共通化というのを図って、教育に関する合理化をと、もう少しスムーズに進ませること、そのことに、学長のリーダーシップをもっと発揮してもいいのではないかというような言葉をいただいている、これが国際的なシビアな視点での最後の提言になっております。

7名のアドバイザーボードの高等研究院のアカデミー会員を、昨年度、一気に充実をしまして、益川先生、小林先生、ノーベル化学賞の下村先生が入られ、ものすごく頭の大きなことになりました。このアカデミー会員と現役会員の差はまだありますので、こういうレベルで物を言われると少し厳しいというのが現役教員の偽らざる本音であります。先ほ

平成21年度高等研究院の構成

○アカデミー会員 7名

○研究プロジェクト代表教員

タイプ1:世界最高水準プロジェクト研究 5名

タイプ2:萌芽的・独創的な若手プロジェクト研究 4名

○高等研究院若手育成特別プログラム

(テニュアトラック教員)

特任准教授・特任講師 15名

○院友

元院長・副院長、元高等研究院教員、元運営推進委員
(計56名)

ど申し上げた5名の会員は、相当なプレッシャーでもって研究活動を行っているようです。これはいいことでもあり、大変なことでもあると思っております。

私なりにまとめさせていただきました。この厳しいお言葉の中でも、今年度に入って

学士院賞を現役の教員がいただいたり、先日の文化功労者にも名誉教授の方がなられたりと、現役プラスアルファのところでも元気にやっているよということで、このアドバイザリーボードには今のところこたえているというように内部からは見ているところでございます。

以上、国際評価の事例を申し上げます。どうもありがとうございます。

《 質 疑 応 答 》

【森田（東京医科歯科大学）】 東京医科歯科大学、研究担当理事の森田です。本日は素晴らしい話をどうもありがとうございました。

先生の大学では、今日ご紹介がありましたような、非常に素晴らしいシステムがあって、我々も参考にしたい部分が多々ありますが、実際、高名な先生方で構成されているインターナショナルアドバイザリーボードがあると、大学における内部評価システムというのが具体的にどういう位置づけになってくるかというのをお聞きしたいのですけれども。

【松下】 内部で行っている評価と、レベルと階層が随分違ったことになっております。この外部評価はほんとうに、若手もシニアのほうも最先端のところを、研究では見ているということ。一方では、大学院教育というのは全体を眺めてくださっていて、大学院教育は、先ほどの視点を裏返すと、グローバルなスタンダードからはほど遠いプログラムを持っている。そういう状況にあるので、2つの視点は随分乖離をしています。国のレベルの内部の自己点検に基づいた評価は淡々と行ったださればいいが、高等研究院として置いたからには、まだまだああいう視点からすると、もの足りないというような、非常に厳しい



高等研究院アカデミー会員（五十音順）



赤崎 勇 飯島 澄男 小林 誠 佐藤 彰一 下村 脩 野依 良治 益川 敏英
 平成21年 京都賞 平成21年 文化勲章 平成20年 ノーベル物理学賞 平成14年 日本学士院賞 平成20年 ノーベル化学賞 平成13年 ノーベル化学賞 平成20年 ノーベル物理学賞

強い言葉をいただいている。しかし、大学全体としては、まあまあ、よくやっている、そういうレベルの評価をいただいているわけです。

【森田（東京医科歯科大学）】 もう1点、お願いいたします。先生のところで、先ほどお話がありましたテニュアトラック関連です。私どもの大学でも苦慮しているのですが、なかなか日本版テニュアトラックをどう構築していくかは問題で、先生の大学の場合、教員の評価をどのように行い、高等研究院や他の大学院の教員への道を考えていらっしゃるのでしょうか。

【松下】 これは、先ほど申し上げたことですが、全部言い尽くされたものではなくて、入り口のところで一定の評価をして、テニュアトラック制度に乗せた人たちが、ほんとうに研究者として、野依先生のお言葉をおかりすると、かぐわしき香りを発するようになるかというのは、まだこれからの問題でわからないので、あそこに同列に並べるべきではないという意見をいただいています。実際の制度としましても、科学技術振興調整費、期間の限られたところで人を雇っていて、この人たちをテニュアトラックとして、我々が中間評価で認めたとしたときに、このポジションをどうするのだというのは実はまだ決定してなくて、これから学内でかなりシビアな議論になるのだと思います。ポジションとしては、将来に向けて確約されているわけではないというので、まだ日本ではそういうことを言うのは早過ぎるのではないかというのが私見でございます。

評価・意思決定のためのインフラ整備（データベース）

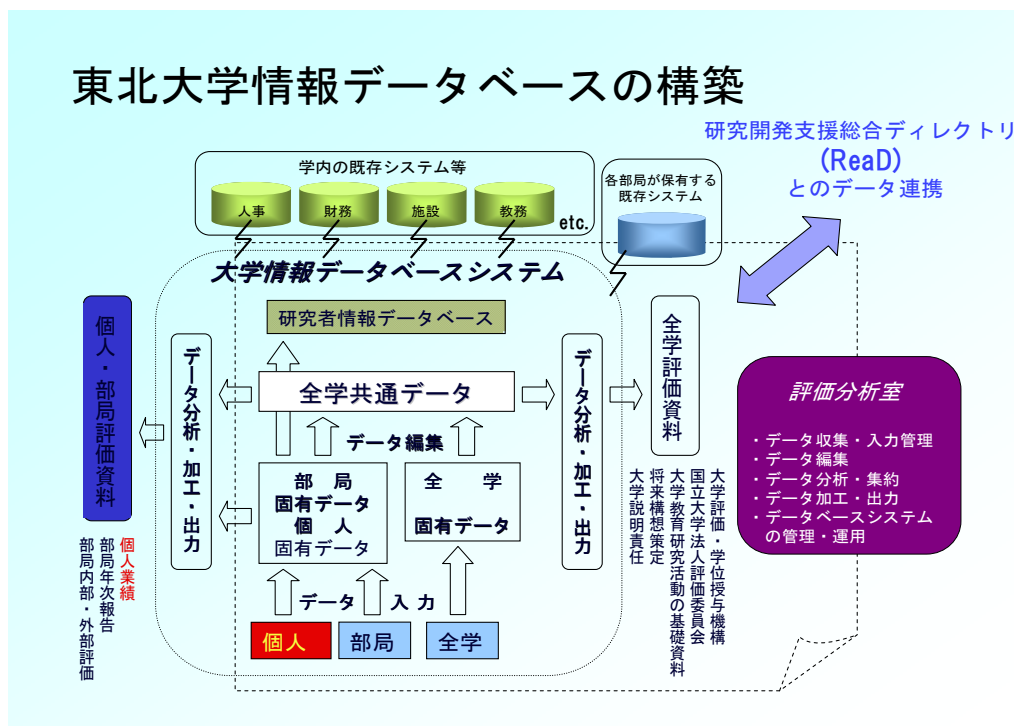
岡田 益男

（東北大学副学長）

今日、私たちの大学で、情報データベースをどういうふうにして構築して、今、どんな運用をして、どんな利用をしているかということ、評価と関連づけてご紹介したいと思います。

1. 東北大学情報データベースの構築

まず、どうして大学情報データベースを東北大学がつくるようになったかというきっかけです。これは、今、大学評価・学位授与機構長の平野機構長がいらっしゃるから申し上げるわけではないのですが、大学評価・学位授与機構で、平成15年、ちょうど法人化の前に、私も8年ぐらい、大学評価・学位授与機構の委員をしております、その中で、これからの評価というのはどうしてもデータベースを利用せざるを得なくなるという方向性がうち出されたことからです。それを総長に相談して、賛成を得て準備を始めました。そのときに、もう既に大学評価・学位授与機構は、平成16年8月に、全部の大学を集めて説明会を行っております。その説明の中で、これからの評価というのはデータベースを使うことが



重要であるということ、かなり強調されたということをお覚えています。

機構からデータベースの項目について詳細に発表がなされ、それを私たちは受け、それをもとにして大学内でゼロからデータベースの準備に着手させていただきました。

部局を集めて6回以上説明会を開きました。困った事は、当時、多くの部局は、自らのデータベースを持っていたので、それを1つに統一するということは、項目について大変な利害関係があったことです。それでも何とか最終的なバージョン7まで来たところです。

その当時は、個人教員1次データベース、部局、全学の2次も考えていたのですが、実際には今、個人教員1次データベースのところで終わっております。これまで、研究者情報データベースはあるのですが、それが評価用ではないところが課題でした。例えば、論文が査読してあるか、してないかなど、その記載がないわけで、評価用には既存のデータベースが使えませんでした。それから、市販されている評価用データベースソフトの有無について調査をしましたが、ありませんでしたので、自らつくことにしました。

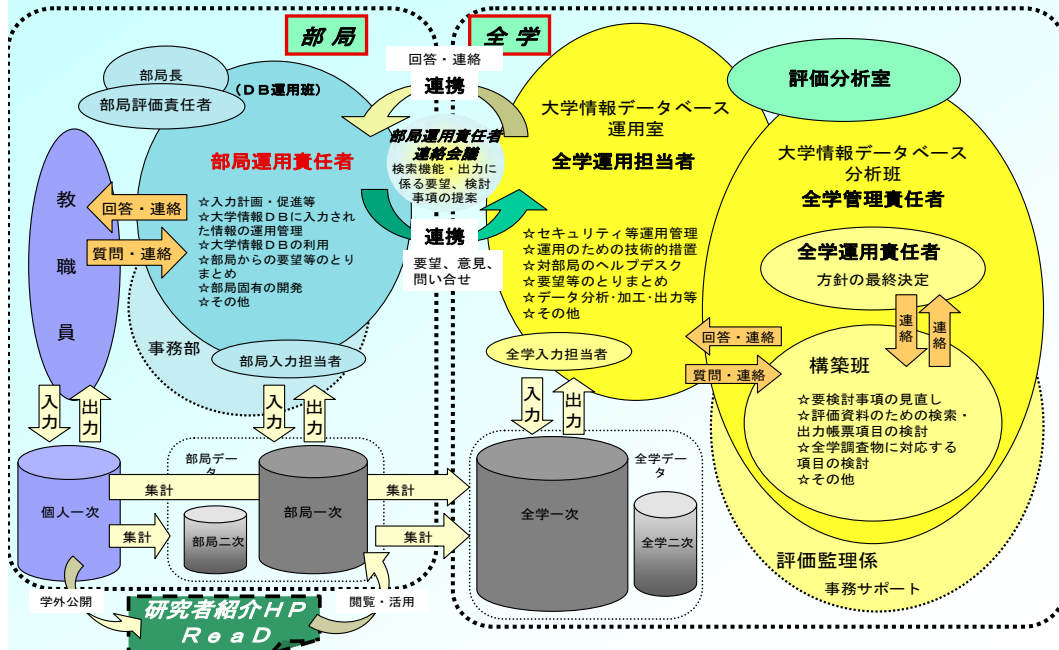
私たちの苦勞を1つご紹介します。例えば理系では、査読がなければ、これは論文ではない。ところが、文系では、査読するような論文は、良いものではない。インバイトノーレビューで書いたものがすばらしいのが文系だと。このように、やはりそれぞれの分野で文化が違えば、論文1つの評価についても違うということがわかりました。そのようなところからスタートしました。最初は、教員はすべての項目を入力するというのでまとめていきました。

それから、打ち込んだデータについては、Readという研究者情報データベースとも連携しております。実際には評価分析室がそれを全部責任持って運営するということになっております。そこから全学評価資料をつくっていくことになります。

2. 大学情報データベースシステム運用

運営ですが、評価分析室でデータベースの全学運用担当者というのを決めております。また、部局にも部局運用責任者を置いております。この部局運用責任者が、教職員の、例えばこのワードがおかしい、打ち込んでもうまくいかない、自分のIDを忘れたなど、対応していただいています。そこでいろいろ問題があったときには、全学運用担当者のほうにご連絡いただいて、それで、毎月1回、データベースの定期会合を設け、検討させていただいております。運用システムをきちんとしたものをある程度つくったというところが、うまく運用できていることだろうと思います。

大学情報データベースシステム運用イメージ



これが実際の画面ですけれども、上のほうにデータ登録、教員個人評価項目、学外公開項目、Read連携、データ確認、ダウンロード、これを押しますとデータ登録ができます。

(※実際の画面は、スクリーン上で説明。) 実際に今、情報公開、公開可否の設定から教職員の略歴、研究活動、教育活動、学生支援、学内運営、社会活動、その他、これだけの項目を入れなければいけません。入力には、まず、丸1日かかるでしょう。皆さんには嫌がられております。どれだけの項目を入力に必須にするかですが、例えば、指導大学院・学部生の発表件数について、理系と文系で意見が異なりました。理系は、発表件数が多数で全部打ち込むことは大変で、工学部、理学部などでは反対でした。ところが、文系ではぜひ必須にして欲しいという意見があり、入力は任意にしました。この辺の項目は、やはりそれぞれの部局の文化に対応するしかないと思います。

全学の必須、任意、Readへの連携項目など、学内では項目ごとに整理させていただきます。

東北大学情報データベースの教員入力項目

一どの任意項目を部局の必須項目にするかは部局の判断一

| NO | 入力画面名称 | 全学必須 | Read | 学外公開 |
|----|------------------|------|------|------|
| 1 | 教職員基本情報 | ○ | ○ | ○ |
| 2 | 出身学校 | ○ | ○ | — |
| 3 | 出身大学院 | ○ | ○ | — |
| 4 | 取得学位 | ○ | ○ | — |
| 5 | 略歴 | ○ | ○ | — |
| 6 | 研究経歴 | ○ | ○ | — |
| 7 | 取得資格 | ○ | — | — |
| 8 | 所属学会 | ○ | ○ | ○ |
| 9 | 所属クラスター | ○ | — | ○ |
| 10 | 専門分野(科研究分類) | ○ | ○ | ○ |
| 11 | 専門分野(Read分類) | ○ | ○ | — |
| 12 | 業績 | ○ | — | — |
| 13 | その他の特記事項(実務家教員等) | 任意 | — | — |
| 14 | 研修受講歴 | ○ | — | — |
| 15 | 研究課題 | ○ | ○ | ○ |
| 16 | 研究キーワード | ○ | ○ | ○ |
| 17 | 研究活動概要 | ○ | ○ | ○ |
| 18 | 論文 | ○ | ○ | ○ |
| 19 | 論文一括登録 | — | — | — |
| 20 | 書籍 | — | ○ | ○ |
| 21 | 書籍一括登録 | — | — | — |
| 22 | 総説・解説記事 | ○ | — | — |
| 23 | 総説・解説記事一括登録 | — | — | — |
| 24 | 特許 | — | — | — |
| 25 | 実用新案・意匠 | ○ | — | — |
| 26 | 作品 | ○ | — | — |
| 27 | その他研究活動 | 任意 | ○ | — |

3. 大学情報データベースの特長

そんな中で、私たち、データベースの特長としましては、教員や学部の評価に必要なデータ項目をかなり網羅して、集計が可能です。それから、中期目標、中期計画にも対応していますし、それと、入力データから自動的に年次報告書を作成できるようにしております。ですから、ある部局で入力データさえあれば、毎年のように年次報告ができます。

理学研究科や情報科学研究科では、毎年のように入力データより報告書を作成しております。

それから、教員個人評価に利用していることです。私たち、作成ソフトをSRA東北を通じて、オープンにしています。今、30大学（資料には10大学ですが、現在国公立大学30校で利用）で利用されております。これをつくるときは大変で費用も係りましたが、構築班、SEが多分5人ぐらい常駐して、丸1年半かけてつくってきました。今、実際に運営しているのは、専任の助教1人、技官の方1人、それとSEの方が1人おります。その3人で運営しています。今日のお話ですと全国の大学の七十何%、もう80%程度が全部データベースを用意されているということで必要ないかもしれませんが、ぜひご利用いただければと思います。オープンです。

それから、システムの運用と、テキスト出力によって、全入力の再利用が可能です。入力していただければ、教員個人が全部それを自分のヒストリーとしてプリントアウトできるなど、自分の経歴をきちんとデー

東北大学が開発した大学情報データベースの特長

— 役に立つデータベースを目指して

- (1)教員や各部局の評価に必要なデータ項目を網羅
教員別、部局別の評価に必要なデータ集計が可能
- (2)大学の中期目標・中期計画に対応
大学全体の中期計画に対する各部局の対応を集計可能
各部局の中期目標・中期計画も入力・集計可
- (3)大学の諸活動をデータとして集計し、年次報告等の作成が可能
教員の教育・研究・国際交流・社会活動などの諸活動をデータ化
各部局の教務関連、研究関連、国際交流関連などの諸活動をデータ化
- (4)教員個人データの一覧を印刷可能
教員個人評価に利用可能
- (5)研究者データベース(ReaD)、東北大学研究者紹介ホームページに対応



全国国立大学データベースの基準を目指す
長崎大学、秋田大学等10大学が導入

東北大学情報データベースのシステム・運用

— 教員の利便性を向上させ、データ入力率および精度の向上を目指す

- (1)入力したデータの再利用
テキスト出力機能により、教員による全入力データの再利用が可能
- (2)教員実績の学外へのアピール — DOI (Digital Object Identifier)
DOIなどを利用して、文献へ直接アクセスできる実績公開画面
- (3)教員実績の学外へのアピール — 東北大学機関リポジトリ
東北大学機関リポジトリと連携し、文献への直接アクセスを可能に
- (4)他DBシステム等との連携
ISIなどのデータベースと連携し、その機能の利用の簡便化
- (5)統合認証の利用 — 近い将来(来年度以降)の課題
ポータルなどの業務システムを入り口としSSO(Single Sign On)による教員利用率の向上



教員の利便性向上 → データ入力率、精度の向上

タとして保てるようにしてあります。それから、今、Digital Object Identifierというのがございますけれども、1つの論文に印をつけて直接アクセスできるところにも対応しております。東北大学の機関リポジトリとも連携しています。それから、ほかのデータベース、ISIとも連携しておりますので、自分の論文の検索も可能です。

現在、私たちの一番の問題というのは、統合認証を学内で一生懸命やっておりますので、この統合認証についてももう少し改修が必要になるところです。今年の8月に、研究者紹介と機関リポジトリを相互運用開始いたしました。それから、DOIのデータ入力についてお願いというのが平成20年から。平成18年からは、理学研究科の物理、数学、化学専攻で年次報告を自分たちでソフトをつくり、その年次報告のつくり方をダウンロードして、これを今、使えるように、実際に運用しております。年次報告が自動的につくれるというのは、これから自己評価書を作成する上では非常に重要なことかと思えます。

4. 大学情報データベースの活用・運用の工夫について

文部科学省からいただいた4つの視点を、次にまとめさせていただきました。まず、データの入力・更新を継続させ、正確な情報の収集をどうするのかということは、最初にご紹介させていただきましたが、教員の評価に使うことがあげられます。教員の評価に使うので、新たなデータを入力していただかなければ、勤勉手当や昇給はないということになります。入力したデータは、それをプリントアウトして評価に使用するという事です。工学研究科では、業績集として分厚い冊子を四、五年に1回作成していましたが、電子データにして、ホームページに掲載し、冊子をやめました。そうしたら、多くの人がデータを更新してくれず、困りました。このデータベースができたときに、入力データの質の保証も大事ですから、書いたものをパブリッシュして、皆で見ることによって、データの質を担保できることから、厚い業績集の冊子を1回つくりました。そうしたら、皆さん入力して頂けました。やはり何か工夫をしないと入力率が上がらない。できたら定期的に何かを刊行していくと良いかもしれません。

戦略的な活用ですけれども、今申し上げましたところと重複しますが、同分野の研究者一覧作成があげられます。例えば、環境はどういう人が研究しているかなど。大学で一番問題になったのが、所属が大学ではないポスドクです。NEDOだとかJSTで雇われている人が東北大学にいる。その方達の研究成果を把握することも重要ですし、本人のデータ記録的にも便利ですので、自分で入力できるようにしました。ですから、東北大学所属でなくて

も、東北大学にいらっしゃる人、それは相互認証とかかわってきますが、その方達もデータベースが利用できるように発展させました。

それから、第2期中期目標期間評価が始まりますので、これから第2期中期計画などについて、部局の実施状況が把握できるように対応したいと思います。

それから、負担軽減に当たって工夫した点です。後からのデータ項目の追加や修正には経費が相当かかりますので、データベース作成時の1年間、どの項目をどうするというを徹底的に議論し、決定しました。やはりシステムの初期構築で、後からの改修をなるべく最小限にとどめる。確定的なものとしてスタートすることが大事だと思います。

それから、医学部は医学部の診療項目などがあり、独自のデータベースを有しています。医学部と全学情報データベースはまだ連携しておらず、相互認証が入るということで、今年あたり、医学部のデータも統合される予定となっています。

やはり重要なのは、当時、あちこち、たくさんあったデータベースを学内で1つにしたことです。これは、すごく大きいと思います。皆さんのデータベースとして、どこまで使いやすいうようにしていくかということが重要だと思います。

もう一つは、先ほど、例を挙げて申し上げましたけれども、データベース項目の定義はなるべく緩やかにしておいて、部局ごとに詳細な定義をすることです。理系と文系の文化は違いますので、部局でどう使用するかをお任せすることもノウハウの1つだと思います。

それから、大事なことは、私たち、定期的にSEを毎年1人ずつ雇っております。簡単な修復は、全部SEをお願いしています。外注はしません。今、SEで、マイナーチェンジでどんどん行っています。随時改修するほうが効果的だと思います。

それから、大事なことは、私たち、定期的にSEを毎年1人ずつ雇っております。簡単な修復は、全部SEをお願いしています。外注はしません。今、SEで、マイナーチェンジでどんどん行っています。随時改修するほうが効果的だと思います。

もう一つ、例えば、研究協力課で、同分野の研究をしている人のデータベースをつくらうという動きがある場合に、研究協力課にデータベースからデータ抽出が可能なことをお知らせする。あちこちにデータベースをつくられると收拾つかなくなるので、情報網を張

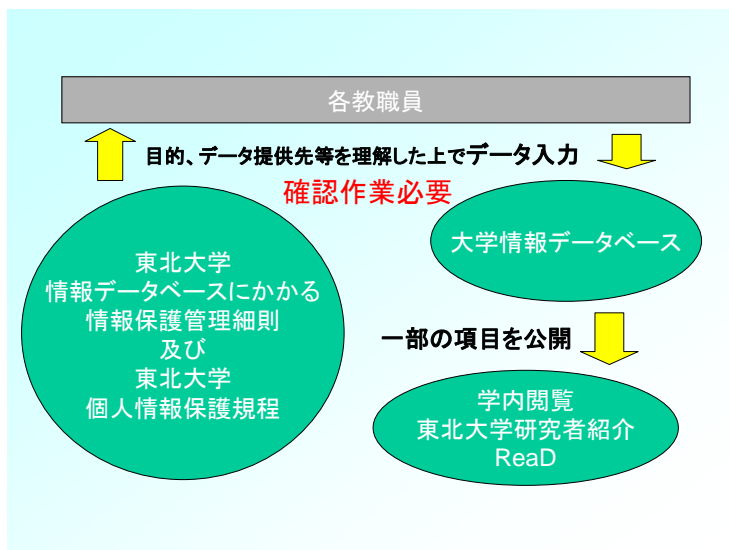
東北大学情報データベースの活用・運用の工夫について

- 1. データの入力・更新を継続させ、正確な情報の収集:**
教員の評価、研究科によっては毎年研究活動レポートの発刊、数年に1回の業績集の発刊、利便性の向上などにより、データの入力を促進
- 2. データ情報の戦略的な活用**
教員評価、アニュアルレポートの発刊、研究者紹介(大学ホームページ、Read,機関リポジトリなどを通じて)、同分野の研究者一覧作成(予定)、東北大学在在のPD等の研究業績の把握、第2期中期目標・中期計画の各部局の活動状況の把握(予定)などに利用
- 3. 運用の体制と業務の負担軽減にあたって工夫した点**
【構築時】
 - ・システムの初期構築で、項目や機能を十分に検討して、後からの改修をなるべく減らした。
 - ・データベースのシステムを部局ごとに保有せず、全部局で利用できるように1つだけ構築する。
 - ・データベースの項目の定義はゆるやかにしておいて、部局ごとに詳細な定義をする。(これは文系、理系で同じシステムを利用するためのノウハウ)【運用上】
 - ・紙調査を廃止し、データベースへ登録されているデータを利用する。
 - ・データベース運用には、特殊なノウハウが必要なので、専門のSEを雇い、随時改修するほうが効果的・効率的。
 - ・似たようなシステムの開発が別の部署で予定されている場合、少しでも早く情報を入手し、同じ部署で管理運用できるように早めにコンセンサスを取る。
- 4. 今後の課題、その他大学の参考となるような事項:**
継続的な大学DBの維持・修正に要する人的、財務的負担、統合認証への利用整備

っておいて、何かあると、そこに行って、データベースの利用についてお声がけするということを今しています。今後の課題は、やはり定期的なDBの維持とか、修正に要する人的、財務的費用とか、統合認証の利用整備です。

5. 情報保護について

情報保護の話を少ししたいと思います。これ、私たちの公開可否設定です。一番最初に公開可否を伺った時は、公開しないと書いた方が多数おりました。各部局にお願いして、個別に公開の意味を説明してもらいました。今は、全部公開可になっています。例えば顔



写真とか旧姓とか、また、出身学校、略歴まで公開、非公開の設定ができることになっております。でも、ほとんどの教員の方は、今は公開していると思います。

6. 部局評価、教員評価について

それから、少し部局評価の話をしたいと思います。私たちは、今、部局を評価しています。年に1回、教育・研究・社会貢献についての自己評価書を書いていただいて、評価分析室がまず自己評価書を書類的にチェックさせていただいて、理事、副学長にそのコメントを出す。ヒアリングを1部局30分、丸2日かけて実施しています。その結果を、それぞれの部局長裁量経費10%に反映しています。最大500万ぐらいになります。そのぐらいの差がつくような部局評価を行っています。

これは、部局の現状について、総長、理事、副学長が把握して、どういう改善の施策があるかどうかなどを検討する目的で行っております。少し例を示したほうがいいと思います。これが平成17年度の部局評価の項目例です。私たち、平成19年度に認証評価を受けましたので、そのときに、各部局に認証評価項目を、部局の評価項目として採用し、自己評価書を書いていただきました。この最初の部局評価は革命的で、部局の教育改革が大きく

進みました。また、20年度の例です。部局の第1期中期目標、中期計画の達成度が評価指標となっており、重みづけは50%です。大事なことは、大学内でも、部局によって文化が違いますので、大学評価・学位授与機構が行っているように、部局の目的、目標に沿って、どの程度、部局の中期目標を達成としているかを評価指標としています。そのほかに、基本的指標で、大学院後期課程の充足率、科学研究費補助金申請率、井上プランの達成度、全学中期目標、中期計画への貢献度など、いろいろな項目を入れております。例えば、評価項目に入れております女性教員比率は、毎年、上がっています。このように、部局評価を実施することで、いろいろな面について改革されていることは、東北大学の1つの特徴かと思えます。

それから、教員の評価について第1期中期計画に書いておりますので、実施する必要があります。例えば、226番で、教員のインセンティブ付与制度の確立とか、教育研究成果の適切な給与への反映と記載されています。それで、私たち、評価分析室では、教員評価のガイドラインを平成18年度に作成し、各研究科に配付しました。各研究科で、また自分たちの教員評価のガイドラインが作成され、約90%の部局で教員評価が実施されております。

工学研究科の教員評価の例としては、教育、研究、組織運営、社会貢献の4領域について必要なデータをデータベースに入力し、入力されたデータベースに基づいて実施されます。ということは、データが入力されないと評価されないということになりますので、多くの方が入力しているようです。

東北大学のデータベース、評価関連は、今、内部ではこのような努力をしております。以上でございます。

研究開発の性格に応じた評価の視点

小嶋 典夫

(山形大学研究プロジェクト戦略室教授)

平成16年から18年に、宇宙航空研究開発機構の評価監査室というところにおりまして、昨年は、物質・材料研究機構というところで、先ほど、松下先生をご紹介いただいたような形で国際アドバイザーボード会合を開催し、ピアレビューを行って頂いたことがあります。大学につきまして、説明させていただきます。

1. 山形大学の概要

まず、山形大学ですが、前身になる師範学校や高等工業学校などはずっと昔からありました。新生大学として1945年に設置された大学で、現在6学部6研究科を持っております。学生数が約9,000人、職員数が約1,900人で、年間の予算が300億円プラスというような規模です。特徴的なことといたしまして分散キャンパスになっており、山形県というのが人の横顔のような形をしています。本部のある山形市に理学部、人文学部、地域教育文化学部の3学部がありまして、1年生が全員学んでいます。また山形市内の少し離れたところに医学部がございます。農学部は、大体100キロほど離れた鶴岡市にあります。それから、大体50キロぐらい離れた米沢市に工学部がございます。

今日、お話しさせていただく内容ですが、大きく2つあります。そのうち前半では、学内

山形大学の概要

1949.5設置＊6学部6研究科を擁する地方中規模総合大学



○21世紀テーマ：自然と人間の共生

○Leading concept:

地域に根ざし、世界を目指す

○経営の基本方針：

◇学生が主役となる大学創り

◇教育、特に教養教育の充実

○学生数：9,268人＝学部 7,933人、
大学院 1,335人

○職員数：1,904人＝教員883人、職員1,021人

○H21収支予算 335億円

教育研究診療等 284億円

うち授業料等収入 56億円、

附属病院収入105億円、

運営費交付金123億円

外部資金 13億円

施設整備費補助金 32億円

○科学研究費補助金 6億円 (251件)

山形大学

の競争的資金をどのように選んでいるか。また、その中間評価をどのように行っているかということで2つの話をします。後半では、山形大学で学部等の組織評価を行っておりますが、その話をさせていただきたいと思います。

2. 山形大学のポリシー（その1、その2）

初めの学内の競争的資金の話に入る前に、なぜそのような制度ができたかという前提を、簡単に説明いたします。平成13年に、「山形大学のあるべき姿」という将来構想をつくりまして、その中で、学内で研究課題の公募を行い、選考の上、時間・資金・場所の支援を行うシステムを検討する必要がある、あるいは、同じ構想の中の別の部分ですが、内部資金の確保として、学内で研究資金を確保し、学内公募の研究課題の中から選ばれた研究に対して、資金や場所の提供などの支援をする必要があるのではないかと、この当時うたわれ ておりました。

具体的な制度ができたのは大分後の話ではありますが、将来構想が出たすぐ後に、学長が変わり、平成13年9月から19年8月まで、仙道前学長が務めておりました。この仙道前学長が、在任期間の最後の2年間になったときですが、これから2年間の山形大学の行動指針ということで、通称、「仙道マニフェスト」をつくりました。その中で、先進的研究分野に対する申請に基づく任期つき教員の採用を行うため、あるいは環境整備をするために、「先進

山形大学のポリシー その1

山形大学のあるべき姿

—21世紀を展望した山形大学の将来像—
(平成13年2月11日)

Ⅲ 大学院及び研究機能の改善充実

3 独創的な研究の促進

(1) 独創的な研究分野と課題

2) プロジェクト型研究

- ・高度な研究，大規模な研究，境界分野の研究を推進するために学科，学部・研究科横断的な特色ある研究プロジェクトを推進する。
- ・学内で，研究課題の公募を行い，選考の上，時間・資金・場所の支援を行うシステムを検討する必要がある。



山形大学のポリシー その1 (2)

Ⅲ 大学院及び研究機能の改善充実

3 独創的な研究の促進

(2) 研究体制と支援体制

3) 研究資金の確保

研究資金を確保するために，積極的に競争的研究資金の導入を図る。

・内部資金の確保

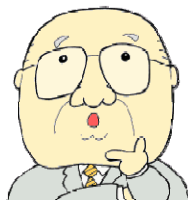
学内で研究資金を確保し，学内公募の研究課題の中から選ばれた研究に対し，研究資金，場所の提供等の支援を検討する必要がある。



的研究支援のための教員配置を伴うプロジェクト」と、「戦略的研究プロジェクトに対する任期つき教員の支援」の2つのプロジェクトを始めました。

山形大学のポリシー その2

これからの2年間の山形大学の行動指針(マニフェスト)
通称「仙道マニフェスト」(平成17年9月16日)



仙道前学長
H13/9-H19/8

山形大学の理念「自然と人間の共生」、「充実した人間教育」、「社会との連携重視」を目指した種々の重点施策

9) 先進的研究に対する支援(任期付き教員定員の確保等)
世界的な研究を目指す先進的な研究に対する大学としての支援は、財政的なものではなく、研究者が十分な研究を行うことの出来る環境を整備することであると考えている。その一環として、今回、先進的研究分野に対する申請に基づき任期付き教員の採用を行うものである。



- ・先進的研究支援のための教員配置を伴うプロジェクト
- ・戦略的研究プロジェクトに対する任期付き教員の支援



3. (1) 先進的研究支援のための教員配置を伴うプロジェクト

1つ目の「先進的研究支援のための教員配置を伴うプロジェクト」ですが、具体的には、助教を全学で2人採用するプロジェクトです。2人は少ない感じをうけますが、規模の小さい大学ですのでこのような人数になります。その身分としましては、個別契約任期つき教員です。ただし、特に学長が必要と認めるときは、特任教授も認められます。その制度に対して、プロジェクトを行いたい代表者から応募してもらい、それを審査する形になりました。18年の3月に募集しまして、応募が10件ございました。

このときの審査は、外部審

先進的研究支援のための教員配置を伴うプロジェクト

・目的
本学における学術研究等の特別の推進を図るため仙道マニフェストに掲げた先進的研究プロジェクトに対して、任期付き教員による人的支援を行うことにより、当該プロジェクトの十分な研究環境を整備する。

・支援教員の職及び人員
原則として助教 全学で2人

・支援教員の身分等
個別契約任期付教員、ただし、学長が必要と認めるときは特任教授

・応募方法
先進的研究プロジェクトの代表者が、当該プロジェクトの概要、支援教員の職務内容等を記載し提出。

・募集期間
平成18年3月3日～平成18年3月31日



先進的研究支援のための教員配置を伴うプロジェクト(2)

・応募件数
10件(理学部4件、医学部1件、工学部2件、農学部2件、学術情報センター1件)

・採択に係る審査

外部審査委員1名を含む審査会(学長、各理事、外部審査委員)で、提案プロジェクトのヒアリングを行い選定

・採択件数

3件(学長裁量定員2名(医学、農学)、学長裁量経費1名(工学))

他に選定に漏れた提案4件に対し、平成18年度限りで各50万円を支援



査員1名を含めた学長、理事5人と、外部審査員1名でヒアリングを行って決めました。

採択されたのは、学長裁量定員で2名、プラス、学長裁量経費で1名、年度が2年にまたがりますが、最終的に3件が選ばれました。ただし、選定に漏れた案件のうち4件に対しても、単年度で50万円の支援を行っております。

選ばれたテーマですが、18年度としましては、工学部、城戸先生の「山形県有機エレクトロニクスバレー構想プロジェクト」と、農学部、安田先生の「熱帯の土壤微生物が植物・植食者・捕食者群集の多様性創出とその共存に及ぼす影響」です。それから、19年

度としましては、医学部、嘉山先生の「放射線医学総合研究所HIMAC利用共同研究「重粒子線によるがん細胞殺傷メカニズムに関する検討」」です。この3件が現在、進行中でございます。

先進的研究支援のための教員配置を伴うプロジェクト(3)

平成18年度採択プロジェクト

- 工学部城戸淳二教授「山形県有機エレクトロニクスバレー構想プロジェクト」(18. 8. 1~22. 7. 31)
- 農学部安田弘法教授「熱帯の土壤微生物が植物・植食者・捕食者群集の多様性創出とその共存に及ぼす影響」(18. 7. 1~22. 6. 30)

平成19年度採択プロジェクト

- 医学部嘉山孝正教授「放射線医学総合研究所HIMAC利用共同研究「重粒子線によるがん細胞殺傷メカニズムに関する検討」」(19. 4~23. 3)



3. (2) 中間評価の実際 (プロジェクト開始2年目)

今日のテーマであります中間評価ですが、中間評価につきましては、2年目と3年目に中間評価を行うということになっております。開始後2年目のプロジェクトについては、少し詳しい審査を行いました。審査は大きく3段階に分かれ、第1段階の書面審査、第2段階

のヒアリング審査及び第3段階の書面審査から構成されます。第1段階の書面審査は、研究

中間評価の実際

先進的研究支援のための教員配置を伴うプロジェクトの支援制度に係る中間評価審査要項

1.目的

本学における学術研究等の格段の充実発展を図るため、「この2年間の山形大学の行動指針(平成17年9月16日制定)」(仙道マニフェスト)に掲げた先進的研究プロジェクトに対し、特に任期付き教員配置により支援を行っているが、当該教員配置による研究プロジェクトの成果を検証し、今後、研究プロジェクトの格段の充実発展を期する。

2.評価方法等

中間評価は、プロジェクト代表者が作成する
平成18年度実施プロジェクト:自己点検中間評価書
平成19年度実施プロジェクト:中間報告書
に基づき実施する。



代表者が選んだ何人かの候補者、これは学外の人ですが、この中から役員会で選んだ人2名、ほかの大学の先生ですとか、その研究分野の方を選びまして、その2名の方に書面審査をしていただきます。第2段階審査は、学長と研究担当理事2名でヒアリングしまして、第3段階として、この2つを総合的に役員会で書面審査する形での中間評価を行っております。

日程的には、大体このような感じで行いました。第1段階審査でピアレビューをお願いした先生に書いてもらった様式がこのようなになっております。項目と、それに評点を付けますが、項目につきましては、こちらに書いてありますように、4項目になっております。「当初の研究目的に沿って、着実に研究計画が実施されているか」、「当初の研究目的に照らして、現時点で期待される成果を挙げているか」、「これまでの研究成果に照らして、今後の研究計画が妥当

中間評価の実際

(1)評価方法（開始2年目のプロジェクト）

- ①書面審査(第1段階審査)
- ②ヒアリング審査
- ③書面審査(第2段階審査):書面審査(第1段階審査)及びヒアリング審査を踏まえ、合議審査

(2)評価の委員

- ①書面審査(第1段階審査)の審査員は、プロジェクト代表者が推薦する学外有識者を参考に、役員会が選考する者(2名)とする。
- ②ヒアリング審査の審査員は、学長及び研究を担当する理事とする。
- ③書面審査(第2段階審査)は、役員会が行う。



中間評価の実際

(3)評価スケジュール

- ① 5月末 中間報告書等の提出期限
- ② 6月中旬 ピア・レビューによる書面審査(第1段階審査) 注)
- ③ 6月下旬 ヒアリング審査(学長及び研究担当理事)
- ④ 7月上旬 書面審査(第2段階審査、役員会)
- ⑤ 7月 教育研究評議会へ報告

注)ピアレビューは、研究代表者が選んだ、外部のレビュワー2人によってなされる。右様式が、ピアレビューの審査書 →

山形大学
先端科学研究センターの教員助成者向けプロジェクトの
実務事業に係る中間評価審査表

プロジェクト名: _____

審査員名: _____

①書面審査(第1段階審査)

| 審査項目 | 審査 | 評点 |
|--|----|----|
| ① 当初の研究目的に沿って、着実に研究計画が実施されているか。 | | |
| ② 当初の研究目的に照らして、現時点で期待される成果を挙げているか(挙げつつあるか)。 | | |
| ③ これまでの研究成果に照らして、今後の研究計画は妥当なものとなっているか。 | | |
| ④ 研究組織は、当該教員の配置に伴い、研究者相互に有機的連携がたもたれ、研究が効率的に進められるものとなっているか。 | | |

(留意)「評価に至ったポイントを記入願います。別添も可」



中間評価の実際

3.審査方針

(1)書面審査(第1段階審査)

A 評価要素

- ①当初の研究目的に沿って、着実に研究計画が実施されているか。(「研究の進展状況」欄)
- ②当初の研究目的に照らして、現時点で期待される成果を挙げているか(挙げつつあるか)。(「研究成果」欄)
- ③これまでの研究成果に照らして、今後の研究計画は妥当なものとなっているか。(「研究計画」「研究の進展状況」「研究成果」欄)
- ④研究組織は、当該教員の配置に伴い、研究者相互に有機的連携がたもたれ、研究が効率的に進められるものとなっているか。(「研究体制及び支援教員配置計画」欄)

(※評価要素の○書きは、中間報告書における主な参照箇所を示します。)



なものとなっているか」、「研究組織は、当該教員の配置に伴い、研究者相互に有機的連携が保たれ、研究が効率的に進められるものとなっているか」と、この4点につきまして、このようなA、B、C、Dの4段階評価という形で、評価を行っております。ちなみに、評価項目と評価基準は、第1段階も第3段階も一緒です。

評価を受けた結果、それぞれのプロジェクトは、総括評価をされます。これは、城戸先生のものですが、「当初計画は順調に実施されており、現行の努力を継続し、今後の研究の進展を期待する」と評価されております。コメントは、ピアレビューで書いてもらった先生方のご意見が大体入っている形のものになっております。

次の安田先生のプロジェクトについても、同じようなこととなります。次の嘉山先生のプロジェクトも同じようなことになっております。

中間評価の実際

B 評価基準

評価要素①～④について、次の評価基準により評点を付す。

| 評点 | 評価基準 |
|----|---------------------|
| A | 現行のまま推進すればよい |
| B | 努力の余地がある |
| C | 一層の努力が必要である |
| D | このまま事業を継続することは適当でない |

(2) ヒアリング審査

書面審査の評価要素①～④について、次の評価基準により評点を付す。

| 評点 | 評価基準 |
|----|---------------------|
| A | 現行のまま推進すればよい |
| B | 努力の余地がある |
| C | 一層の努力が必要である |
| D | このまま事業を継続することは適当でない |



中間評価結果

プロジェクトの名称: 山形県有機エレクトロニクスバレー構想プロジェクト
プロジェクトの代表者: 城戸淳二

(総括評価)

当初計画は順調に実施されており、現行の努力を継続し、今後の研究の進展を期待する。

(コメント)

平成18年度まで2つのNEDOプロジェクトの基礎的な研究を担当し、有機ELにおいては、世界トップレベルの研究成果を上げた。特に、白色発光有機ELにおいては、発光効率、素子寿命ともに世界トップレベルの成果を達成して、実用化に向けて研究開発を有機エレクトロニクス研究所に引き継ぎ、研究を展開している。当初の研究目的に沿って研究計画が推進され、着実に成果が上がっていると思われる。

また、研究体制については、平成18年7月に有機材料研究に詳しい夫勇進助教、有機トランジスタなどの有機デバイス研究に詳しい中山健一准教授、平成18年8月に有機半導体材料からデバイスの基礎に関して深く精通する横山正明特任教授が加わり、広く有機デバイス研究を進展するための研究体制が整ったと思われる。城戸教授のリーダーのもとで、相互に関連する有機デバイスの研究を連携して分担することで、今後の大きな研究に進展が期待される。



中間評価結果

プロジェクトの名称: 熱帯の土壤微生物が植物・植食者・捕食者群集の多様性創出とその共存に及ぼす影響

プロジェクトの代表者: 安田弘法

(総括評価)

当初計画は順調に実施されており、現行の努力を継続し、課題解決と今後の研究の進展を期待する。

(コメント)

生物群集の多様性創出とその維持機構の解明に、土壤微生物・植物・植食性昆虫・捕食性節足動物の4者系を用いて、その相互作用をボトムアップ効果の観点から実証的に検証しようとする試みは、野心的であり独創的である。

しかし、当初の予想とは異なる結果も得られており、今後における成果の評価はそれらの意外な結果に対してどのような答えを得ていくにかかっているように思われる。例えば、菌根菌の形成は植物の成長を助長し、病原菌に対する抵抗力を高めると考えられてきたが、鶴岡とジャワにおける野外実験の結果は、いずれの季節においても殺菌剤処理区で植物のバイオマスがコントロール区よりも有意に大きいことを示している。ただし、カリマンタンではそのような傾向は検出されていない。これには、実験の不備も考えられるが、菌根菌が植物群集に及ぼす影響に関する従来の常識を覆す重要な結果である可能性もあるように思われる。本研究は、それらの結果に答えを出す方向で多少研究計画を修正されるよう期待したい。



中間評価結果

プロジェクトの名称:放射線総合医学研究所HIMAC利用共同研究「重粒子線によるがん細胞殺傷メカニズムに関する検討」
プロジェクトの代表者:嘉山孝正

(総括評価)

当初計画は順調に実施され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と評価される。

(コメント)

重粒子線による癌の細胞死のメカニズムが非アポトーシスプログラム細胞死であるとの仮説を立てての計画は、細胞死のメカニズムだけではなく、重粒子線治療に対する耐性のメカニズムについても解明しつつある。

重粒子線治療による細胞死及び耐性メカニズムを解明することにより、薬剤や分子標的薬と併用した重粒子治療など、革新的な癌の治療戦略が発信される可能性が高く、今後大いに研究の進展が期待される。



3. (3) 中間評価の実際 (プロジェクト開始3年目)

始まって3年目の中間評価につきましては、2年目に外部委員を入れたピアレビューまで行っているの、少し簡略化しております。こちらでは、自己点検中間評価を、これはプロジェクトを推進している人から書いてもらいまして、それをもって中間評価にかえることにしております。必要

中間評価の実際

(1) 評価方法 (開始3年目のプロジェクト)

① 自己点検中間評価の実施をもって中間評価に換える。
② 必要に応じて、役員会においてヒアリングを実施することがある。

(2) 自己点検中間評価

A 評価要素

① 当初の研究目的に沿って、着実に研究が進展しているか。
② 当初の研究目的に照らして、現時点で期待される成果を挙げているか。

B 評価基準

| 評点 | 評価基準 |
|----|----------------|
| A | 計画どおり順調に進展している |
| B | 計画どおり概ね進展している |
| C | 研究の進捗が遅れている |



に応じてヒアリングも行いますが、こちらの審査では、評価の要素としては2つだけです。

「当初の研究目的に基づいて着実に進展しているか」と、「当初の研究目的に照らして、現時点で期待される成果を挙げているか」です。さらに、評価基準も3段階で行いますので、少し簡略化した評価になっています。

4. 戦略的研究プロジェクトに対する任期付き教員の支援

次に、もう一つのプロジェクトである、「戦略的研究プロジェクトに対する任期付き教員の支援」につきまして説明いたします。

こちらにつきましては、原則1人分の人件費を支援するプログラムで、採用した人に対し

て年間500万円、ただし、もっと良い人を雇いたいのであれば、プロジェクト代表者が負担すればいいですという形で、教授、准教授、助教を個別契約任期つき教員、または特任教授として採用いたします。一応、支援期間は3年以内で、中間評価を2年目に実施し、事業終了後は事後評価を実施するというので、募集をかけた。

審査方法ですが、この場合は、最初の採用審査の段階で、先ほどの中間評価でご説明したような第1段階の外部委員によるピアレビューの書面審査、第2段階のヒアリング審査、それから、第3段階として、役員会で合議審査する方法をとっております。ですから、先ほどと一緒にですが、ピアレビューのところには、プロジェクト代表者が推薦した学外有識者から2名選んで行ってもらっております。

そのときの審査の要素ですが、この4点になっております。「学術的に見て、推進すべき重要な研究課題であるか」、

戦略的研究プロジェクトに対する任期付き教員の支援

・目的

本学における国際的に通用する、特に先進的研究の推進を図るため、**任期付き教員の配置に必要な人件費の支援**を行う。

・支援内容

支援人員：原則1人
 支援経費：支援人員1人に対して5,000千円/年額を目途とする。
 (本支援経費を超える人件費については、プロジェクト代表者等において負担すること。)
 経費の使途：教授、准教授、助教(以下「教員」という。)&び特任教授の人件費に充当する。
 身分：個別契約任期付教員 または 特任教授
 支援期間：同一プロジェクトに対して3年以内

・中間評価・事後評価

①中間評価は、2年度目を実施する。
 ②事業終了後、提出された成果報告書に基づき事後評価を実施する。



戦略的研究プロジェクトに対する任期付き教員の支援

・審査

(1)審査方法

①書面審査(第1段審査)
 ②ヒアリング審査
 ③書面審査(第2段審査):書面審査(第1段審査)及びヒアリング審査を踏まえ、合議審査

(2)審査員

A 書面審査(第1段審査)の審査員は、プロジェクト代表者が推薦する**学外有識者**を参考に、役員会が選考する者(2名)とする。
 B ヒアリング審査の審査員は、学長及び研究を担当する理事とする。
 C 書面審査(第2段審査)は、役員会が行う。



戦略的研究プロジェクトに対する任期付き教員の支援

・審査方針

(1)書面審査(第1段審査)

A 評価要素

①学術的に見て、推進すべき重要な研究課題であるか。
 ②研究目的を達成するため、研究計画は十分に練られ、その進め方が着実なものとなっているか。
 ③組織全体としての研究遂行能力は十分に高いか。また、支援教員等は十分大きな役割を果たすことが期待されるか。
 ④従来受けていた研究費での研究成果を評価するとともに、研究課題に対する高い遂行能力を有していると判断できるか。

B 評価基準：評価要素①～④について5段階評価

(2)ヒアリング審査：上記評価要素①～④について5段階評価
 (3)書面審査(第2段審査)：書面審査(第1段審査)及びヒアリング審査の評価結果を基に、合議により支援プロジェクトを決定



「研究目的を達成するための研究計画が十分に練られているか」「組織全体としての遂行能力」それから、「従来受けていた研究費での研究成果を評価するとともに、研究課題に対する高い遂行能力を有していると判断できるか」、これを5段階評価しております。応募が7件ございまして、そのうち1件を選んでおります。ほかに、1件、単年度限りで50万円支援いたしました。

選ばれたのは、理学部、岩田先生の「CERN-COMPASSにおけるハドロン構造の研究」ということで、20年度に中間評価を行っております。

中間評価の方法は今までと全く一緒ですが、この3段階評価です。

結果としまして、総括評価で、順調に実施されていますということで、コメントはこのようなものがついておりません。

戦略的研究プロジェクトに対する任期付き教員の支援

・応募件数

7件(人文学部1件、理学部1件、医学部1件、工学部2件、農学部1件、学情セ1件)

・採択件数

1件(学長裁量経費で1名採用分)(理学)
他に1件平成19年度限りで50万円を支援(工学)

・採択プロジェクト

理学部岩田高広教授「CERN-COMPASSにおけるハドロン構造の研究」(19. 4~22. 3)

平成20年度中間評価実施(中間報告書により実施済)(H20. 6. 10~15)

平成22年度事後評価を実施予定



中間評価

戦略的研究プロジェクトに対する任期付き教員の支援制度に係る中間評価要項

1. 目的 (略)

2. 評価方法等

中間評価は、プロジェクト代表者が作成する中間報告書に基づき実施する。

(1) 評価方法

① 書面審査(第1段審査)

② ヒアリング審査

③ 書面審査(第2段審査): 書面審査(第1段審査)及びヒアリング審査を踏まえ、合議審査



中間評価結果

プロジェクトの名称:CERN-COMPASSにおけるハドロン構造の研究
プロジェクトの代表者:岩田高広

(総括評価)

当初計画は順調に実施され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と評価される。

(コメント)

本研究は素粒子・原子核分野における「核子スピンの起源」を解明するものであり、新しい実験データが国際的にも待たれている分野である。申請者は国際競争の激しいこの領域では成否の鍵を握る「偏極ターゲット」を長年開発してきており、着実に成果が上がっている。

また、実験データを収集しながら、国際共同実験の各グループの中で存在を示しつつ、支援事業のサポートを得て、CERNに常駐する研究チームを形成できたことは今回の成果の大きな要素であり、今後の大きな研究に進展することが期待される。



5. 山形大学のポリシー（その3）

ここまでの話は先代の学長がいたときに始めたもので、これからは、平成19年9月に就任しました現在の結城学長になってからの話をいたします。

平成19年ですから、西暦2007年の9月に就任しまして、2008年から、これは暦年のほうの2008年1月から12月までを見越した、「結城プラン2008」を立てました。その中の研究の項目の中に書かれた目標を、具体的なプロジェクトとして立ち上げております。

ここにあります5つのプロジェクトが、結城学長になって、次の年度から始まったということになります。「新任教員のスタートアップ支援」、「科研費に関する若手教員研究助成」、「大型の競争的外部資金獲得のための支援」と「女性教員の国際学会への旅費支援」、「科研費の計画書に関するアドバイザー制度」です。この5つについて簡単に説明いたします。

山形大学のポリシー その3



結城プランで創設されたプロジェクト



結城学長 H19/9-
似顔絵イラスト：
地域教育文化学部 小野としみ
さん 作

- 新任教員のスタートアップ支援
- 科学研究費補助金に関する若手教員研究助成
- 大型の競争的外部資金獲得のための支援
- 女性教員の国際学会への旅費支援
- 科学研究費補助金計画書に関するアドバイザー制度



6. 新任教員スタートアップ支援

新任教員のスタートアップ支援につきましては、件数4件程度、1人あたり100万円を単年度で与える、そういうものがございます。条件としましては、42歳以下の新任教員で、次年度、科学研究費補助金に申請する意志を持っていることです。応募は、各部局長が取りまとめて出してもらい、役員会で決定して支援するということですが、20年度、9人応募がありまして3人、21年度は、17人応募があつて4人に支援しております。

支援を受けた人がその後どうなったかということですが、20年度にもらった3人につきまして、科学研究費補助金の若手研究スタートアップに1人通りました。2年分合わせて195万円ということで、大学としては300万円経費を出しましたが、得られた競争的資金は若干減って、率はよくなかったようです。

新任教員のスタートアップ支援

- 事業の目的
本制度は、若手教員育成のための基礎作りとして、新任教員を対象とし、研究開始時の環境整備など、スタートアップに係る支援を行うことを目的とする。
- 支援の内容
 - 支援件数は、4件程度
 - 支援経費は、1件あたり100万円
 - 支援期間は、単年度



新任教員のスタートアップ支援 (2)

- 応募方法等
応募条件:42歳以下の新任教員、次年度科研費に申請すること
応募方法:部局長が当該部局をとりまとめ申請。件数制限なし。
提出期限:7月31日(平成21年度の場合)
- 選考方法
役員会において決定
必要に応じ役員会においてヒアリングを実施
- 成果報告等
次年度5月末までに提出
成果報告書は本学HPに掲載し公表する



新任教員のスタートアップ支援 (3)

- 応募数 平成20年: 9人
平成21年: 17人
- 採択数 平成20年: 3人
平成21年: 4人

- 審査
前提条件: 科研費を取っていない、他の学内競争的資金を取っていない
事前審査: 研究担当理事及び学部出身理事が審査
役員会で決定



新任教員のスタートアップ支援 (4)

前年度実績 (100万円×3人=300万円)

| 採択種目 | 採択数 | 直接経費内定額(千円) | | | | 計 |
|-------------|-----|-------------|------|------|------|-------|
| | | 21年度 | 22年度 | 23年度 | 24年度 | |
| 若手研究スタートアップ | 1 | 1,050 | 910 | 0 | 0 | 1,960 |
| 計 | 1 | 1,050 | 910 | 0 | 0 | 1,960 |

内定者所属部局

| 採択種目 | |
|-------------|-----|
| 若手研究スタートアップ | 医学部 |



7. 科学研究費補助金に関する若手教員研究助成

次の科学研究費補助金に関する若手教員研究助成ですが、これは科学研究費補助金に出して落ちたけれども次の年にしっかり科学研究費補助金をとります、という人に対して、つなぎ的な経費を30件、1件につき50万円、単年度で支援するものであります。

これも、若手ということで、42歳以下が対象です。次の年、獲得に向けビジョンがあることという点が重要なので、部局長が、本制度の目的及び科学研究費補助金審査結果を考慮し、順位をつけて、その学部ごとに申し込みをもらうという形で申請させております。審査するときには、学部ごとの科学研究費補助金の申請状況を勘案しまして、先ほどの順位をつけた候補者の、例えば、理学部3人となれば、順位をつけた上から3人を選ぶというような形で選んでおります。

実際には、20年度は52人中35人、21年度は47人中30人に支援しております。ちなみに、

科学研究費補助金に関する若手教員研究助成

目的

本制度は、自由な発想に基づき、先進的で独創性のある研究を進めようとしている本学の若手教員であって、科学研究費補助金に応募したが惜しくも不採択となった研究課題に対して、次年度以降の採択に向け、その研究経費の一部を支援し、研究環境の充実を図ることを目的とする。

助成の内容

助成件数: 全体で30件程度

助成額: 1件につき50万円/年の範囲内

助成期間: 単年度



科学研究費補助金に関する若手教員研究助成(2)

- 応募方法等
- 募集条件
 - ・当該年度科学研究費補助金に応募し不採択になった者
 - ・年齢42歳以下
 - ・次年度以降の科研費申請・獲得に向けビジョンのある者
- 応募方法
 - ・部局長は、当該部局を取りまとめ申請する
 - ・申請件数に制限を設けない
 - ・部局長は、申請が複数件ある場合、本制度の目的等及び科研費の審査結果を考慮し、順位を付すこと。
- 提出期限: 6月26日(平成21年度の場合)



科学研究費補助金に関する若手教員研究助成(3)

- 応募数 平成20年: 52人
平成21年: 47人
- 採択数 平成20年: 35人
平成21年: 30人
- 審査
科研費申請状況から部局毎の配分枠を決め、提案の有った上位から採択。
役員会で決定

